

若松賤子作

忘れ形見

朗読 山崎洋子



若松賤子（わかまつ しずこ）

1864年（元治1） - 1896年（明治29）。福島県会津若松市出身。

会津藩士の長女として生まれるが、幼児に両親を失って横浜の織物商・大川家の養女となり、外人宣教師の訓育下にフェリス女学高等科を卒業。巖本善治と結婚。母校で教師をする一方、創作や翻訳活動を精力的に行い、キリスト教精神による教育的随筆も数多く発表している。バーネット原作の「小公子」の紹介は彼女によるもの。

1890年（明治23）発表の「忘れ形見」は「一人の孤児を愛しく思い優しくする子爵婦人。臨終の際にも“あのお方のように潔く生きるように”と遺言する。未亡人の彼女を是非にと妻にした子爵は乳飲み子だった愛児を手離せと迫っていたのだった」という内容。本編は翻案小説だともいわれるが、幕末から維新、明治にかけての会津藩の様子と人間模様が重ねられて描かれているようにも思える。いずれにしても、子供の姿態を清新な口語体でとらえ表現しているところに彼女の特徴があるといえよう。

「用語解説」

従四位（じゅよんい）

昔の位階で同一等級の正位（しょうい）の下に列する位。従一位

従二位、従三位に続く位

遊獵場（ゆうりょうば）

狩をして遊ぶところ

緑子（みどりご）

新芽のように若々しい子

篝火（かがりび）

夜中の警護などの際に周囲を照らすために焚（たく）火

下郎（げろう）

人に使われる身分の賤しい男

婢女（しもめ）

神の前で“卑しい女”とへりくだって言うときの言葉

あなた僕の履歴を話せて、仰おつしやるの？ 話しますとも、直じつき話せつちまいますよ。
だつてぼくは十四にしかならないんですから。別段たい大したよろこび悦えきも苦勞もした事がない
んですもの。ダガネ、モウ少し過ぎると僕は船ふなのり乗になつて、初めて航海ゆに行くんです。
実にたのし楽たのしみなんです。どんな珍しいものを見るかと思つて……段々海へ乗出して往ゆく中
には、為ためとも朝なんかのように、海賊を平たいらげたり、虜とりこになつてるお姫さまを助けるよ
うな事があるかも知れませんかからね。

これまでは、ズツト北の山の中に、徳蔵おじと一処じゆよんいさまにいたんですが、そのまえは、先せんの
殿様ね、今では東京にお住いの従四位様のお城しろあと趾あしがを番あしがしていたんです。足利時代か
らあつたお城は御維新のあとでお取崩とりくずしになつて、今じゃ堀へいや築地ついでじの破れを蔦つたかづら桂けい
が漸ようやく着物を着せてる位ですけれど、お城しろに続ついてる古い森が大層おほい広いのを幸しあい鹿しかや
兎うさぎを沢山うさぎにお放はなしになつて遊獵場ゆうりやうばに変かえておしまいなさり、また最寄もよりの小高見こたかみへ別

莊をお建てになつて、毎年秋の木の葉を鹿ががさつかせるといふ時分、大したお供揃ともぞろいで
獵犬や馬を率ひかせてお下くだりになつたんです。

僕はまだ少ちいさかつたけれど、あの時分の事はよく覚えていますよ。サアお出いでだといふ

さきぶれ

むかしかたぎ

たいまつ

て

われさき

お先布令があると、昔堅氣の百姓たちが炬火をふり輝てらして、我先と二里も三里

でぞろ

まちうけ

にとらびき

とどろき

も出揃でぞろつて、お待受まちうけをするのです。やがて二頭曳の馬車の轟とどろきが聞えると思

たづな ひか

ゆるゆる

ものなれ

うと、その内に手綱たづなを扣ひかえさせて、緩々お乗込ゆるゆるになつてゐる殿様と奥様、物慣ものなれない

ごうぎ

僕たちの眼にはよほど豪氣ごうぎに見えたんです。その殿様というのはエラソウで、なかなか

ごうぜん

たび

傲然ごうぜんと構かまえたお方で、お目通りが出来るところではなく、御門をお通りになる度たびごと

に徳藏おじが「こわいから隠かくれている」といい／＼しましたから、僕は急いで、木の蔭かげや

なんかへかくれるんです。ですがその奥さまというのが、僕のためにはナンともいえない好い

い方で、その方の事を考えても、話にしても、何だか妙うれに嬉うれしいような悲うれしいような心

持がして来るんです。美人といえはそれまでですが、僕はあんな高尚な、天人のような美人は見た事がないんです。先下々の者が御挨拶を申上ると、一々しとやかにお請をなさる、その柔和でどこか悲しそうな眼付は夏の夜の星とでもいいそうで、心持俯向いていらつしやるお顔の品の好き！しかし奥様がどこことなく萎れていらつして恍惚なすつた御様子は、トント嬉かった昔を忍ぶとでもいいそうで、折ふしお膝の上へ乗せてお連になる若殿さま、これがまた見事に可愛い坊様なのを、ろくろくお愛しもなさらない塩梅、なぜだろうと子供心にも思いました。

近処のものは、折ふし怪しからぬお噂をする事があつて、冬の夜、炉の周囲をとりまいては、不断こわがつてる殿様が聞咎めでもなさるかのよう、つむりを集めて潜々声に、御身分違の奥様をお迎えなさったという話を、殿様のお家柄にあるまじき瑕瑾のようにはいいました。その話というはこうなんです。

人の知らない遠い片田舎に、今の奥さまが、まだ新嫁でいらしたところ、一人の縁子にいよめを形見に残して、契かたみ合ちぎりあつた夫が世をお去りなすつたので、迹あとに一人淋さびしく侘住わびずまいをして、いらつしやつた事があつたそうです。さすがの美人が憂うれいに沈しずんでる有様、白そ
うびが露に悩むとでもいいような風情ふぜいを殿がフト御覧になつてからは、優ゆうに妙たえない
容姿ようすに深く思よせいを寄よせられて、子爵の御名望ごめいぼうにも代かえられぬ御執心ごしよもうと見えて、行ゆきつ戻もどり
つして躊躇ためらつていらつしやるうちに遂とうとう々奥方ごしよもうにと御所望ごしよもうなさつたんだそうです。とこ
ろがいよいよ子爵夫人の格式をお授さずけになるといふ間際まぎわ、まだ乳房ちぶさにすがつて赤子あかごを
「きようよりは手放して以後親子の縁はなきものにせい」といふ厳敷きびしきお掛合かけあいがあつて
涙ながらにお請いならをなさつてからは今の通り、やん事なき方々と居並ぶ御身分いなとおなりなさ
つたのだそうです。ところが何故か始終浮立ぬようにおくらし成なるのに不審うつを打うつものさ
え多く、それのみか、御寵愛ごちようあいを重ねられる殿にさえろくろく笑顔をお作りなさるのを

見上た人もないとか、鬱陶しうつとうそうにおもてなしなさるは、お側そばのチンも殿様も変わった事はないとお附つきの女中が申もうしたとか、マアとりどりに口賢くちさがなく雑談をしました。徳蔵おじは大層あるじな主人おもいで格別奥さまを敬愛している様子でしたが、度々たびたび林の中でお目通りをしてる処を木の影から見た事があるんです。そういう時は、徳蔵おじは、いつもかしこまかしこまって奥様の仰事おおせごとを承うけたまわっているようでした。勿論何のことか判然聞取ききとれなかつたんですが、ある時あかね茜あかねさす夕日の光線が樅もみの木を大きな篝火かがりびにして、それから枝を通して薄暗い松の大木にもたれていらつしやる奥さまのまわりを眩まばゆく輝かさせた残りめしで、お着衣めしの辺を、狂い廻り、ついでに落葉をもえと燃ゆくころさせて行頃何か徳蔵おじが仔細しさいありげに申上るのをお聞なさつて、チョット俯向きうつむにおなりなさるはずみに、はらはらと落おつる涙が、お手もちにお持もちなさつた一と房の花の上へかかるのを、たしかに見た事があるんですが、これをおもえば、徳蔵おじの実じつてい貞じつていな処を愛して、深い思おぼしめし召めいのある

事をおおせにでもなったものと見えます。

僕はちい小さい内から、まじめで静かだったもんだから、近処のものがあたりまえの子供のあどけなく可愛ところがないといい／＼しましたが、どうしたものが奥さまは僕を可愛やおっしやらぬ斗ばかりに、しっかり抱だきしめめて下すったことの嬉しさは、忘れられないで、よく夢に見い見いしました。僕はモウ先せんから孤みなしごになつてたんだそうでお袋なんかはちつとも覚えがないんですから、僕の子供心に思うことなんざあ、聞きいてくれる人はなかつたんですが、奥さま斗すきりには、なんでも好きなことがいえたんです、「いいからどんなことでもかまわずお話し」と仰しやるもんだから、お目に掛つたその日は木登りをして一番大きな松ぼっくりを落したというような事から、いつか船に乗って海へ行つて見たいなんていう事まで、いっちまうと、面白きいがつて聞きいていて下すつたんです。

時々夢に見たつて色々不思議な話しをして下すつた事がありました。そのお話しとい

うのは、ほんとうに有そうな事ではないんですが、奥さまの柔おとなし和くツて、時として大層あわれ哀なつばいお声を聞くばかりでも、嬉しいのでした。一度なんぞは、ある気狂い女が夢中に成なて自分の子の生血を取てお金にし、それから鬼だまに誘惑されて自分の心を黄金こがねに売ふる払ったという、恐ろしいお話しを聞いて、僕はおっかなくなり、青くなつて震えたのを見て「やっぱりそれも夢だったよ」と仰さつて、淋さびしそうにニツコリなすつた事がありましたッけ。

マアどれほど親切で、美しくツて、好い方だったか、モウ先のことだけれど、きのうきょうのように思われますよ。いつかフト子供心に浮んだことを、たわいなく「アノ坊なんぞも、若さまのように可愛らしくなりたい」といいましたら、奥様が妙に苦々しい笑いよなうを為なつて、急に改まつて、きつぱりと「マアぼうは、そんなことを決していうのじゃありませんよ、坊はやっぱりそのままがわたしには幾いくら好いいのか知れぬ、坊のその嬉しそ

うな目付、そのまじめな口元、ひとつも変えたい処はありませんよ。あの赤坊は奇麗あかんぼう きれいか
は知りませんが、アノ従四位様のお家筋に坊の気高い器量けだかに及ぶ者は一人もありません。
とにかく坊はソツクリそのまま、わたしの心には、あの赤んぼうよりか、だれよりか可愛
くツてならないのだよ」と仰有おっしやって、少しだまっていたら泣出して、
「坊はね能よくお聞ききよ。先におなくなり為なすって、遠方の墓に埋られていらつしやる方に、
似てるのだよ。ぼうもねその方の通りに、寛大ゆつたりして、やさしくツて、剛勇つよなつておく
れよ。こゝろ聞いて訳もなく悲しくなつて、すすり泣なきしながら、また何気なにげなく、「アアそ
の墓に埋つてる人は殿さまのようにえらいお方？」というみさげはてと、さも見下果たという様子
を口元にあらわして、僕の手を思い入れ握りしめ、「どうしてどうしてお死になされたとわ
たしが申もうした愛いとしいお方の側へ、従四位様を並べたら、まるで下郎げろうを以もつて往いったようだ
ろうよ」と仰有なでって、力のなさそうな溜息ためいきをなすつて、僕のあたまを撫ながら、「坊も

どうぞあの通りな立派な生涯を送って、命を終る時もあのよう*まこと*にいきぎよくなければなりません。真の名誉というものは、神を信じて、世の中に働くことにあるので、真の安全も満足もこの外に得られるものでないと、つねづね *おつしや* 仰ったことを、御遺言として、記憶しておいで」と、心を一杯籠めて仰ったのを、訳はよく分らないでも、忘れる処か、今そこだろうかと思ったようにおぼえているんです。

いつかはまた、ちよつとした子供によくある熱に浮されて苦しみながら、ひるの中は *うち* 頻りに寐反りを打って、シクシク泣いていたのが、夜に入ってから少しウツウツしたと思つて、フト眼を覚すと、僕の枕元近く奥さまが来ていらつしやつて、折ふし霜月の雨のビシヨビシヨ降る夜を侵していらしたものだから、見事な頭髪からは冷たい雫が *しづく* 滴したたっていて、気遣わしげなお眼は、涙にうるんでいました。身動をなさる度ごとに、*あ* 辺りを輝らすような宝石がおむねの辺やおぐしの中で、ピカピカしているのは、なんで

もどこのかの宴会へお出いでになる処であつたのでしよう。奥さまの涙が僕の顔へ当つて、奥様の頬ほほは僕の頬おっに圧おっついている中に僕は熱の勢か妙な感じがムラムラと心に浮んで、

「アア／＼おつかさんが生いきていらつしやれば好いいにねえ」というのを徳蔵おじが側から

「だまつてねるだアよ」といいましたツけが、奥様が「坊はわたしが床とこの側に附ついて

上ればおんなじじゃないか」とおつしやつたのを、僕がまた臆おく面めんなく「エエあなたも大

変好すきだけれど、おんなじじゃないわ。だつておつかさんは、そんな立派な光る物なんぞ

着てる人じゃなかつたんだものを」というと、それはそれは急にお顔色が変わつたこと、ワ

ットお泣なきなさつたそのお声かなしの悲かなし そうでしたこと。僕はあんなに身をふるわしてお泣なきな

さるような失礼をどうしていったかと思つて、今だに不思議でなりませんよ。そしてその

夜は、明あけ方がたまで、勿も体つないほど大事にかけて看病して下すつたんです。

次に思い出されるのはしわすのもの淋しい夜の事でした。折ふし徳蔵おじは椽えん先さきで、

しも しらら もみ
霜に白んだ樅の木の上に、大きな星が二つ三つ光っている寒空をながめて、いつもに
なく、ひどく心配そうな、いかにも沈んだ顔付かおつきをしていましたッけが、いつか僕のいる
方を向て、「ナニ、奥さまおくがナ、えらい遠方へ旅いに行ッて、いつまでも帰らつしやら
ないんだから、逢あいに来いッてよびによこしなすったよ」と気のなさそうにいいました。
何か仔細しさいの有そうな様子でしたが問返しもせず、徳蔵おじに連つれられるまま、ふたりとも
だんまりで遠くもない御殿の方へ出掛でかけて行りましたが、通つて行く林の中は寂さびしくッて、
ふたりの足音が気味わるく林響こだまに響くばかりでした。やがて薄暗いような大きい御殿へ来
て、辺の

立派なのに肝きもを潰つぶし、ヒョット殿さまが出ていらしッたらどうしようと、おそるおそる
徳蔵おじの手をしつかり握りながら、テカテカする梯子段はしごだんを登り、長いお廊下を通つて、
漸ようやく奥様のお寝間ねまへ行ゆきつき着つきましたが、どこからともなく、ホンノリと来る香こうは薫かおり床ゆか

しく、わざと細めてある行燈あんどうの火影ほかげ幽かに、室へやは薄暗がりでしたが、炉ろに焚たく火が、
僅わずか燃残もえのこつて、思い掛けぬ時分にパット燃上つては廻りを急に明るくすると思えば、
また俄にわかに消失せて、元の薄暗がりになりました。僕は気味悪さに、ただそこここと見
廻ぼかしている斗りでしたが、「モット側へおより」と徳蔵おじにいわれて、オジオジしながら
ら二夕足三足、奥さまの御寝おやすみなつてるほうへ寄よりますと、横になつていらつしやる奥様
のお顔は、トント大理石の彫刻のように青白く、静な事は寝ていらつしやるかのようにでし
た。僕はその枕元にツクネンとあつけにとられて眺ながめていると、やがて恍惚うっとりとした眼
をひらい開ひらいてフト僕の方を御覧はじめになつて、初はじめて気が着ついて嬉しいという風に、僕をソツト引
寄かて、手枕をさせて横に寐かかし、何かいおうとして言い兼かねるように、出そうと思う言葉
は一々長い歎息ためいきになつて、僕をジツト抱だきしめめようとして、モウそれも叶かなわぬほどに弱
つたお手は、ブルブル震えていましたが、やがて少し落着て……、落着てもまだ苦しそう

に口を開けて、神に感謝の一言「神よ、才才神よ、日々年々のこの婢女の苦痛を哀れと見しもめそなわし、小児を側に、臨終を遂とげさせ玉うを謝し奉たてまつる。いと浅からぬ御恵もて、婢女の罪と苦痛を除き、この期ごにおよび、慈悲の御使おんつかいとして、童わらべを遣つかわし玉いし事と深く信じて疑わず、いといたかしこみ謝し奉る」と。祈り終って声は一層幽かすかに遠くなり、「坊や坊には色々いい残したいことがあるが、時迫せまって何もいえない……ぼうはどうぞ、無事に成人して、こののちどこへ行て、どのような生涯を送っても、立派に真の道を守まもておくれ。わたしの靈たましいはここを離れて、天の喜びに赴おもむいても、坊の行末によつては満足が出来ないかも知れません、よつくここを弁わきまえるのだよ……」。とおっしゃる

仰おつしやつて、いまは、透き通るようなお手をお組みなされ、暫しばらく無言でいらつしやる、お側へツツ伏ふして、平常教ふだんえて下すつた祈願いのりの言葉を二た度三度繰返して誦となえる中うちに、ツートよくお寐入ねいりなきつた様子で、あとは身動きもなさらず、寂ひっそりした室内には、何

の物音もなく、ただ彼の暖炉かだんろの明滅が凄すごさを添えてるばかりでした。子供ながらもその場のおごそ厳きごみかな気込きごみに感じ入って、佇たたずんだままでいた間はどの位でしたか、その内に徳蔵おじが、「奥さまはモウおなくなりなさったから、お暇いとましなければならぬ、見納みおさめにモウ一度お顔をよく拝おがんでおけ」と声を曇らしていいました。僕は死ぬるといふ事はどういふ事か、まだ判然分らなかつたのですが、この時大事な大事な奥様の静かに眠つていらつしやるのを、跡に見てすすり泣きしながら、徳蔵おじに手を引ひかれて、外へ出た時、初めて世はういものという、習い始めをしました。